

Title	期待値からみた取り立て助詞：複合表現シハシナイの特徴をめぐって
Author(s)	山倉, 佐恵子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 105-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91585
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

期待値からみた取り立て助詞—複合表現シハシナイの特徴をめぐって—
人文学研究科 言語文化学専攻 博士後期課程2年 山倉佐恵子

第1節 はじめに

日本語学の研究において、助詞「は」の意味に関する議論は多くあるのに対して、「は」を含む「～しはしない」という文末形式が表す意味の議論は、それほど盛んではないようである。この形式は、助詞「は」が動詞連用形に接続する形をとり、例えば「逃がしはしない」、「渡しはしない」のように用いられる。このうち、助詞「は」は、「取り立て助詞」に分類され、「も」、「でも」、「さえ」などと同列に論じられることが一般的である（[寺村, 1991]など）。特に、「も」は他のものを累加して表す助詞であり、「は」は他のものを排他的に表わす助詞として比較されることもしばしばである。このような研究の流れから考えると、「も」が表す累加の機能との対照の中で、「は」や「～しはしない」が表す排他的の意味を考察することも十分可能であると思われる。したがって、本論文では、「～しはしない」の「は」が表す意味について、助詞「も」の意味解釈に用いられる「E値のスケール [山中, 1991b]」という概念を用いて分析と考察を行う。具体的には、「ある事態の成立を期待・予測する度合い」であるE値という概念を用いて、対比の「は」と「も」を比較する形で、「は」が含意する「ある事態の成立を期待・予測する度合い」を明らかにしたい。

第2節 先行研究

2.1節 「～しはしない」に関する先行研究

本節では、「～しはしない」という形式を扱う先行研究を概観する。まず、「～しはしない」は、例えば以下のような形で用いられる。なお、以下では、(1)や(2)のように、「逃がしはしない」や「行きはしない」といった形であっても、便宜上「～しはしない」と呼ぶ。

- (1) 「いや、逃がしはしないぞ」 隆之は、降魔の剣を握りしめ、強く念じた。
([『一千年の陰謀』 井沢元彦 角川書店 BCCWJ])
- (2) 「知っていれば雨がふるのに岩のほうまで行きはしないわ」 青木[1992:273]

「～しはしない」の意味について、先行研究では、「意味が曖昧である」[日本語記述文法研究, 2009:29]といった記述や、「(「は」の主な役割である主題提示や)対比や譲歩の感じられない例」[青木, 1992:275]といった記述が見られる。このような記述は、助詞「は」の基本的な役割に「主題」と「対比」の二つがあるという記述を前提にした上で、しかし、名詞修飾節などで使われている「は」は「主題」を表さず、また、「対比」としては具体的内容に欠けるという現象を背景に持つものと考えられる。しかし、「～しはしない」における「は」は、主節に現れるものであり、かつ、否定形に接続するという同様の形で多くの用例も見られる。さらに、もし先行研究の指摘通り、「～しはしない」の「は」に曖昧な意味しかないのであれば、この形式が存在する理由についてさらなる説明が必要となるはずである。上記の理由から、本稿では、「～しはしない」という形式は、この形式で一定の意味をなすと仮定し、議論を進めることとする。ただし、「～しはしない」という1つの形式が持つ意味を明らかにするために、その一部を形成する助詞「は」の意味的貢献という観点からも分析を試みる。

2.2節 助詞「も」に関する先行研究

続いて、「も」に関する先行研究を見ておこう。先述したように、「は」は「も」との比較の中で分析されることが多かった。確かに、文の主題を表す機能に関して言えば、もっぱら「は」が議論の中心となるため、完全に同列の扱いとは言い難いが、指示対象を他と対比するか並列するかという点で対称性が読み取れることから、「は」と「も」の比較は十分に可能であると考えられる。

「も」は、取り立て助詞、すなわち、「ある事態を他の事態から取り立てることで強調する助詞」とであるとされる。より具体的には、並列的な事物を累加して含意するのが基本的な機能である。例えば、(3)では、「彼」を取り立て(4a)の意味を表すと同時に、(4b)のように、彼以外の誰か、例えば「彼女」が運転することも連想させる。

- (3) 彼も運転する
- (4) a. 彼が運転する
- b. 彼以外（彼女、あなたなど）が運転する

ここで、「も」の用法の一つとして、「意外の「も」」と呼ばれる用法を確認しておきたい。「意外の「も」」とは「類似する情報のうちスケール上値がもっとも低い意外な情報だけを「も」で表現する [定延, 1993:148]」用法であるとされる。例えば(5)では、「他の誰かが愛想を尽かしても、親は愛想を尽かさなまいだろう」という想定が存在する。しかし「その親でさえ愛想を尽かした」というのが「も」が表す意味になる。ここで、「他の誰かが愛想を尽かしても…」という想定は、「Xが愛想を尽かす」ことに関して「親」が「X」に該当しないという想定だと言い換えることができる。なお、定延[1993]における「スケール」という概念は、山中[1991b]による「E値のスケール」という概念を援用したものであるが、これについては2.3節で詳しく説明する。

- (5) 親も愛想を尽かした。

なお、「意外の「も」」に関する重要な特徴の一つとして、「も」が提示する並列的な「X以外の要素」は、ことさら意外性がなくとも、「文面から大体予想されるもの」[沼田, 2009:135]であればかまわない点が挙げられる。例えば、(6b)の「親以外の誰か」は、現実世界に実在しない存在（例えば想像の中の不特定の存在）であっても文は成り立つ。さらには、(7)のように、「首相以外」の存在が文脈の中で明示されていなくとも、意外性の意味は理解される。

- (6) a. 親が愛想を尽かした
- b. 親以外の誰か—例えば他人—も愛想を尽かすが、親は愛想を尽かさなまいと思った。
 [沼田, 2009:134]
- (7) 緑化運動には首相も乗り出すほど、力を入れられた。[沼田, 2009:135]

本節で見た「意外の「も」」がもつ2つの意味的特徴、すなわち、(i)E値を含蓄することと、(ii)「X以外」の要素は文面から予想されるものであることは、本論文で扱う「～しはしない」の「は」の意味とも大きく関わる。

2.3節 「E値のスケール」に関する先行研究 [山中, 1991b]

本節では、2.2節で言及した「E値 (EXPECT 値) のスケール」について概観する。これは「命題成立可能性のスケール [定延, 1993]」とも呼ばれる概念で、次のように定義される。

- (8) 「話し手が表現時以前の聞き手との共通認識から提示した要素が命題関数を満たすことに関して、期待・予測する主観的な評価の度合い」 [山中, 1991b]

換言すると、E値とは「ある事態の成立を期待・予測する度合い」である。E値は、スケールを内包するための先行文脈が必要であるとされるため、文脈と取り立てた「X」によって含意の受け取りやすさも異なってくる。特に含意されやすいのは、語自体が段階性を有する場合である。例えば(9)の「社長」のように、階級のある語はスケールが含蓄されやすい。「社長」という語からは、「部長」や「課長」といった役職に関する他の要素が想起されやすいのと同時に、それら他の役職と比べて「典型的にはペコペコしない」という知識も喚起される。このような前提知識を基に、(9)からは「普通はペコペコしない社長がペコペコする」という含意が解釈されるわけである。

- (9) あの人には、社長もペコペコする。

このような、「社長」「専務」「部長」といった役職に関して、「Xがペコペコする」のE値を図式化したものが図1である。図1では、「部長や専務は、社長に比べるとペコペコしやすい」というような段階性、すなわち、「Xがペコペコする」に対するE値のスケールが表されている。

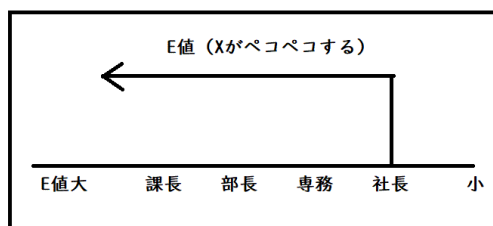


図1：E値のスケール[山中, 1991b]

本稿では、以上で見たE値という概念が助詞「は」の意味にも関わると仮定し、考察を進める。その上で、E値はあくまで「X」と「X以外」の二つの間に成り立つものとする沼田[2009:137]の考えに沿う。沼田[2009]では、「も」がE値を有し取り立てる際に視野に入っているのは「X」と「X以外」のE値の差だとしている。つまり、沼田の主張は、「も」におけるE値に関して、「X以外」の諸要素間の差は問題にならないということだとまとめられるが、本稿では、助詞「は」においても沼田の主張が適用できるものとする。

- (10) 彼は努力してとうとうラテン語も理解できるようになった。
- (11) 「例えば上の例の場合、「自者」¹「ラテン語」に対する「他者」は、文脈に明示されない限り、「ラテン語」より「理解できるようになる」のが容易である言語と考えられる。それには例えば、「ロシア語」や「ギリシャ語」等を想定することができる。彼に「ロシア語」や「ギリシャ語」を他者として、その際「ロシア語」や「ギリシャ語」についても「理解できるようになる」可能性の高低の序列が問題になるかというところではない。「も」²は「自者」と「他者」の可能性の高低は問題にするが、「他者」の中の個々の要素の序列は問題にしない。」[沼田, 2009:137]

第3節 E値から見る助詞「も」

本節では、E値を「X」と「X以外」の二者間に働くものとして見た場合、その働き方を示すことを目的とする。これについて、澤田[2007]は、可能性の世界と現実世界の関連としてE値のスケールの変化を(13)のように述べている。また、(13)を図示したものが図2と図3である。

- (12) 花子も笑った。
- (13) (12)の例では、「太郎と次郎と花子について、花子が一番笑わない人物である」という共通知識が話し手と聞き手にあったとしよう。そこで(12)が発話された場合、まず、花子が笑ったことで、花子は現実世界の笑った人物の集合に関連づけられ、花子以外に笑った人がいることを含意される。同時に可能性の世界では命題を成立させる要素としてE値が小さかった要素（花子が笑う）が、現実世界でその命題を成立させたことによって、可能性の世界のE値のスケールは変化する。つまり、E値の小さい命題「花子が笑う」が成立したことから、現実世界にある命題を成立させる要素の集合に「花子」は関連づけられ、同時に可能性世界にあるE値のスケールは変化する。」[澤田 2007:20]

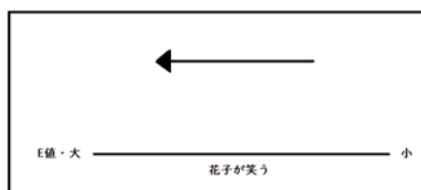


図2：命題が成立する前の EXPECT 値のスケール[澤田 2007:21]

¹ 「自者」は本稿における「X」にあたり「他者」は本稿における「X以外」にあたる。

² 本稿における「意外の「も」」を指す。

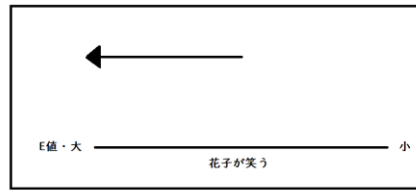


図3：命題が成立した後の EXPECT 値のスケール[澤田 2007:21]

本稿では、「X」と「X以外」の双方を、想定の中にあると仮定して、E値を「X」と「X以外」に共通する一つの命題に設定されるものだととらえる。そしてE値の低い「X」がE値の高い「X以外」に含まれるという、状況を同じ仮想世界にあるということを図4のように表す。図4は、(14)の「花子も笑った」という文において、「Xが笑う」という命題に関して、太郎と次郎というE値の高い「X以外」と花子というE値の低い「X」が存在することを表している。そしてE値の低い「X」も、E値の低い「X以外」と同じ群に含まれることが示されている。

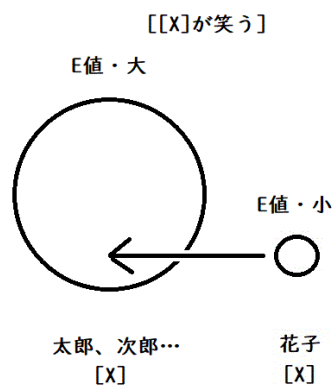


図4：(12)における「も」の働き

- (14) 花子も笑った。(=(12))
 (15) a. 花子が笑う。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—が笑うが、(普段は笑わない) 花子は笑わないと思った。

図4の形にすることで、(15b)の含意の上で(15a)が成り立ったことが表現され、累加の「も」が使用される理由も明確に示すことができる。つまり、「も」は「X以外」の集合に「X」が追加されることを表しているのである。この集合とそれに追加される要素として「X」と「X以外」を捉えることで、「も」の否定形の場合および「は」の文も統一的に説明することが可能になる。

否定文(16)の場合は、E値による成立を問われる命題は「Xが笑わない」とであると解釈できる。この文における前提は「(普段はとてもよく笑う花子が) 笑わなかった」などが仮定できよう。「X以外」には太郎や次郎など、E値の高い人物、つまり、「Xが笑わない」の可能性が高い人物が当てはまると考えられる。「花子」は笑わない可能性の低い人物であるのに、その花子が笑わなかったということが、(16)では示されるわけである。

- (16) 花子も笑わなかった。
 (17) 花子も笑わなかった。
 (18) a. 花子が笑わない。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—が笑わないが、(普段はよく笑う) 花子は笑うと思った。

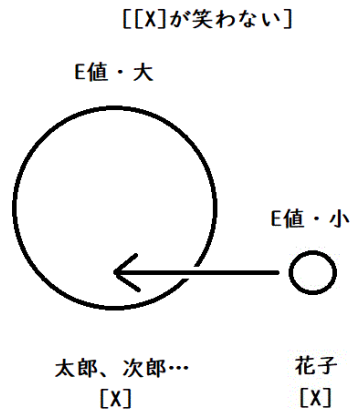


図5：(16)における「も」の働き

このように「も」は、肯定文の場合も否定文の場合もE値の低い要素を示し、その「X」が成立してしまうという含意が見ることができた。次節では、このような「X」と「X以外」の関連性から「は」についても分析を行っていく。

第4節 E値から見る助詞「は」

同様に、E値と「は」の関係を見よう。「も」と比較するために、「も」の議論とほぼ同じ用例を用いて分析を進める。しかし、「は」は主題の意味にも解釈されやすいため、対比の文脈を強調しながら行いたい。まず名詞に接続する一般的な対比の「は」におけるE値について考える。

- (19) (太郎や次郎などは笑わなかったが) 花子**は**笑った。
 (20) 社員Aはぺこぺこしたが、社員B**は**ぺこぺこしない。

このような文の中には、「太郎と次郎が笑わなかったのだから、花子も笑わないだろうと思った」や「社員Aはぺこぺこしたのだから、社員Bもぺこぺこするだろう」のような想定が存在する。このことから「は」で取り立てられた事物は、「反対の事態のE値の高さ」を持つと仮定できる。「花子は笑った」の場合は、「花子が笑わない」ことに対するE値が高く、「社員Bはぺこぺこしない」の場合は、「社員Bがぺこぺこする」ことに対するE値が高いという具合である。

- (21) [X以外]は笑わないが、花子は笑う。
 前提：太郎や次郎などが笑わないのなら、花子も笑わないだろう
 →「花子が笑わない」というE値が高い

これを「X」と「X以外」の対立という観点で分析すると、「X以外」は太郎や次郎などにあたる。命題の内容としては「太郎や次郎などが笑わない」であるため、「は」の場合は「X以外」のE値も高いと考えられる。E値の高い「太郎や次郎など」の集合から、同じくE値の高い「X」だけを独立させて事態「Xが笑わない」が不成立であることを表すのである。そのため、含意は(23)および図6の通りになる。

- (22) 花子**は**笑う。
 (23) a. 花子が笑う。
 b. 花子以外の誰か—例えば太郎や次郎—も笑わないので、花子も笑わないと思った。

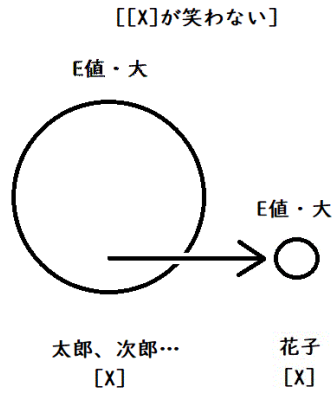


図6：(23)における「は」の働き

さらに、「は」の場合に「反対の事態のE値の高さ」があることは、否定形でも共通して確認することができる。(24)では、「太郎や次郎は笑ったが、花子は笑わなかった」という前提が仮定できる。ここでの命題は、「Xが笑う」という事態だと考えられる。「花子」は「Xが笑う」の「X」に入り命題を成立させることに対してE値が高い要素だったと言えよう。

- (24) 花子は笑わなかった。
- (25) 花子は笑わなかった。
- (26) a. 花子が笑わない。
b. 花子以外の誰か—例えば太郎—も笑うので、花子も笑うと思った

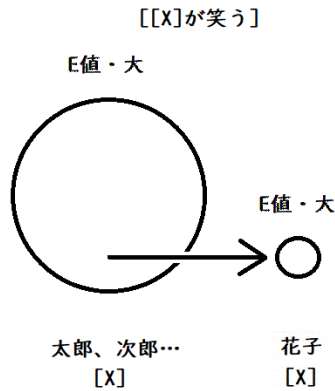


図7：(24)における「も」の働き

このように、「も」はE値が低く、「は」は反対の事態のE値が高いことが確認できた。そして動詞連用形に接続する場合も、同様にE値に対する含意があると考えられる。次節で分析を行う前に、「は」、「も」と肯定文、否定文のE値の対応関係をもう一度ここでまとめたいと思う。

- (27) 花子も笑った。
前提：太郎や次郎などが笑うが、(いつも笑わない) 花子は笑わないだろう
→「花子が笑う」というE値が低い
- (28) 花子も笑わない
前提：太郎や次郎などが笑わないが、(いつもよく笑う) 花子は笑うだろう
→「花子が笑わない」というE値が低い
- (21) (「X以外」は笑わないが)、花子は笑う。
前提：太郎や次郎などが笑わないのなら、花子も笑わないだろう
→「花子が笑わない」というE値が高い

- (29) 「X以外」は笑うが、) 花子は笑わない。
 前提：太郎や次郎などが笑うのなら、花子も笑うだろう
 →「花子が笑う」というE値が高い

第5節 E値から見た動詞連用形と助詞「も」

続いて、動詞連用形に接続した場合も「も」は「E値の低さ」、「は」は「反対の事態のE値の高さ」を表していることを確認する。分析には実例を用いて、含まれる前提とE値が文脈に則していることを観察していく。なお、「も」については、「～しはしない」と対応する形として、「～しもする」「～しもしない」などを対象にする。

- (30) 「あんた、これからどうするつもりなの」と言いながら栩谷は、それにしても
 いったい俺はそんなことを他人事のように訊けた義理かと心中ちょっとおかしくな
 りもする。(「花腐し」松浦寿輝 講談社 BCCWJ)
 (31) 御神輿は、あらぬ向かう側を練つて、振向きもしないで四五十間ずつと過ぎる
 (泉鏡太郎「祭のこと」『鏡花全集 卷二十七』岩波書店 青空文庫)

(30)は、話者の栩谷が、相手にアパートの立ち退きを要求しながら今後について尋ねている状況である。このシーンの直前には、栩谷自身も自身の会社が倒産寸前という描写がある。自分の会社が倒産寸前の状況で、他の人物に今後を尋ねることが「ちょっとおかしくなる」と述べているわけである。ここで重要なのは、栩谷の状況は、何かをおかしく思いにくい身の上だという点である。その期待しがたい「おかしくなる」という行為が成り立っていることが「～しもする」により示されている。そのため事実と想定としては、(34ab)が含意されていると考えられる。

- (32) 栩谷は(中略)ちょっとおかしいという気持ちになりもする。
 前提：「X以外」にはなるが、おかしいという気持ちにはならないだろう。
 →「おかしいという気持ちになる」というE値が低い
 (33) 栩谷は(中略)ちょっとおかしいという気持ちになりもする。
 (34) a. ちょっとおかしいという気持ちになる。
 b. おかしいという気持ち以外の何か—例えば諦めの気持ちなど—にはなるが、
 おかしいという気持ちにはならないと思った。

ここでの特徴は、「X」と「X以外」に値するものが事態である点である。「X」には、「ちょっとおかしいという気持ちになる」ことが入り、「X以外」には「ちょっとおかしいという気持ちになる以外の何かになる」ことが入るが、これは意外性のない事態一般を指すため、以降は単に「～する」と表す。E値の高い「X以外」が成り立つ上に、E値の低い「X」、「ちょっとおかしいという気持ちになる」ことも成り立つという含意が確認できる。これを図示したものが図8である。

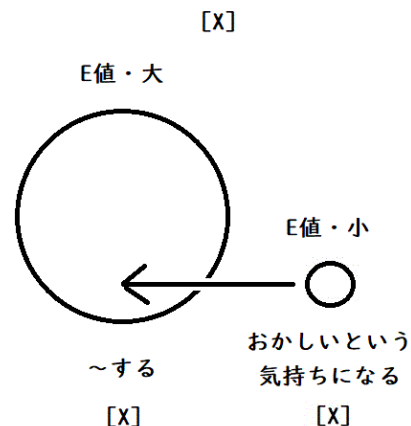


図8：(30)における「も」の働き

次に、否定文にも同様の含意があることを確認していきたい。(31)は、長患いをしている女性店員がお祭りの音を聞いて、店先まで神輿を見に行ったが、神輿は単に彼女を通り過ぎるという場面である。この少し前では「盛り上がるお神輿は人が担ぐのではなく、霊とともに人の波を思うがままに操る」「御神輿は行きたい方へ行き、めぐりたい方へめぐる。ほとんど人間業ではない。」のように、神輿の神がかりに関する描写がある。そんなお神輿が、患いで店も寂れ落ち込む女性に振り向くことさえなく行ってしまいう状況である。ここで、(31)の意味は図9のように表される。

- (35) お神輿は(中略)振り向きもしないで四五十間ずつと過ぎる。
前提：「X以外」はしないが、振り向くことはするだろう
→「振り向かない」のE値が低い
- (36) お神輿は(中略)振り向きもしないで四五十間ずつと過ぎる。
- (37) a. 振り向きもしないで過ぎる。
b. 振り向かないで過ぎる以外の何か—例えば立ち止まるなど—にはなるが、振り向かないで過ぎることはしないと思った。

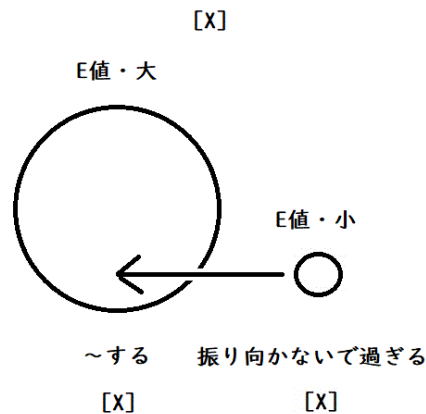


図9：(31)における「も」の働き

第6節 E値から見た「～しはしない」

それでは「～しはしない」におけるE値の分析に移ろう。(38)は、(1)の前後の文脈を取り出した例である。話者である隆之が敵の李煌を追う場面が書かれている。(38)の末行で隆之は「逃がしはしないぞ」と述べているが、一般的に考えて建物の中の人物がヘリコプターに乗っている人を逃がさないというのは難しい。他にも「屋敷があと一分で爆発する」など、李煌を逃がす原因となりうる要素はいくつも見られる。したがって、(39)のように、隆之は李煌を「逃がす」ことのE値が高いと言える。そのようにE値が高いという含意がありながらも、「逃がさない」と述べていることが、「～しはしない」の使用から解釈できるのである。「逃がす」ことへのE値の高さと、「逃がさない」という発言の両方を図に表すと図10のようになる。

- (38) 「ここまで来て、劉道士を倒した手並みは褒めてやる。だが、これまでだ。まもなくこの屋敷は爆発する」
「なんだと？ お前はどこにいる？」
「わしか。わしは空の上だ。バルコニーに出てみろ」
「なんだと？」 隆之は、急いでバルコニーに通じるガラス戸を開け、外に出た。かなり高空にヘリコプターがホバリングしていた。
「わかったか。あと一分でそこは爆発する。わしはお前の最期を見届けてから、ここを去ることにする。さらばだ、小僧」
「いや、逃がしはしないぞ」 隆之は、降魔の剣を握りしめ、強く念じた。
(『一千年の陰謀』井沢元彦 角川書店 BCCWJ)

- (39) 「X以外」はするが、逃がしはしないぞ
 前提：屋敷が爆発するのなら、逃がすだろう（捕まえそこねるだろう）
 →「(敵を) 逃がす」のE値が高い
- (40) 「逃がしはしないぞ」
- (41) a. 逃がさない
 b. 逃がさない以外の何か—例えばビルが爆発するなど—は起こるかもしれないが、逃がすことはしない

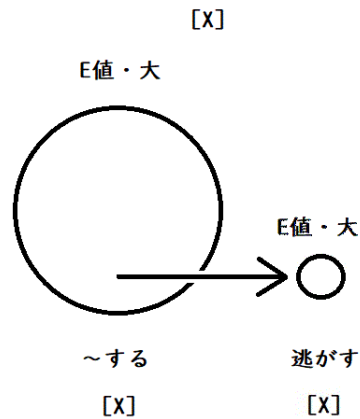


図 10：(38)における「は」の働き

同様の例として、(42)を見てみよう。(42)の背景を少し説明すると、話し手である禎輔は、聞き手である昌作が自分の妻と恋仲にあると勘違いし、昌作を九州に左遷させようとする。禎輔の勘違いを知った昌作が、禎輔を問い詰めると、禎輔は、過去に昌作の母と恋仲にあったこと、そして、それがもとで昌作を左遷しようとしたことを述べる、という場面である。(42)のセリフは、昌作の左遷は達子との誤解とは関係ないことを言おうとしたものであるが、自分の母が禎輔と恋仲にあるとは知らない昌作にとって、どんな男でも妻と親しくすれば、その人に対して「馬鹿げた考えを起こす」のはE値の高いことと思われる。これを図に表すと図 11 のようになる。

- (42) 「全く別の男なら、いくら達子と親しくしようと、僕はあんな馬鹿げた考えを起しはしない。然し君は、君のお母さんの子だ。それがいけないのだ。」
 (豊島与志雄「野ざらし」『豊島与志雄著作集 第二巻(小説Ⅱ、1-13-22)』未来社青空文庫)
- (43) 「X以外」はするが、馬鹿げた考えを起こしはしない
 前提：ある男に馬鹿げた考えを起こすのなら、(全く別の男でも)馬鹿げた考えを起こすだろう
 →「(全く別の男でも)馬鹿げた考えを起こす」のE値が高い
- (44) 「馬鹿げた考えを起こしはしない」
- (45) a. 馬鹿げた考えを起こさない
 b. 馬鹿げた考えを起こさない以外の何か—例えば嫉妬するなど—はするかもしれないが、馬鹿げた考えを起こすことはしない

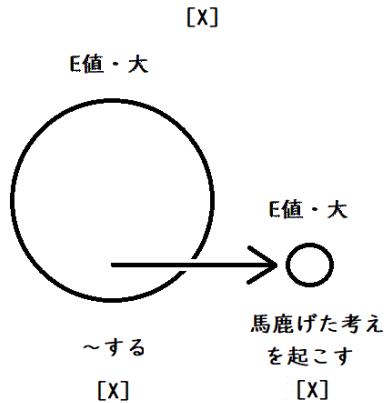


図 11 : (42)における「も」の働き

第7節 まとめ

連用形に接続する「は」と「も」の両方に、E 値に基づく含意があることが確認できた。なお、「も」の「E 値の低さ」と「は」の「反対の事態の E 値の高さ」は、他の用例でも観察できる。例えば、(46) は「～しはしないか」という疑問形であるが、「拇指の腹が痛くなる」が成立する可能性が高いという想定があると言える。さらに、「～しはしない」は「～しはしないか」の形で多数観察される特徴もある。こういった動詞連用形と取り立て詞にまつわる含意について、より一層の考察を行っていききたい。

- (46) 第二は、松山がスポーツ好きで、「ええいッ」と大声をあげて場に積んである麻雀牌をひっぱってくることだ。気を付けていると、その度に、彼は麻雀牌の面に刻みつけてあるしるしをギュッと強く撫でまわした。それがために、拇指の腹が痛くなりはしないかと思われた。(海野十三 「麻雀殺人事件」『海野十三全集 第1巻 遺言状放送』三一書房 青空文庫)

参考文献

- 青木伶子. (1992). 『現代語助詞「は」の構文論的研究』. 笠間書院.
 定延利之. (1993). 「心的な情報処理操作と用法の派生—モをめぐって—」. 『高度な日本語記述文法作成のための基礎的研究』 平成4年度文部省科学研究費補助金総合研究 研究成果(A)報告書.
 定延利之. (1995). 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」. 『日本語の主題と取り立て』. くろしお出版, 227-260.
 澤田美恵子. (2007). 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』. くろしお出版.
 寺村秀夫. (1991). 『日本語のシンタクスと意味 III』. くろしお出版.
 沼田善子. (2009). 『現代日本語とりたて詞の研究』. ひつじ書房.
 日本語記述文法研究会. (2009) 『現代日本語文法5 とりたて・主題』. くろしお出版
 山中(澤田)美恵子. (1991a). 「も」の焦点とスコープ」. STUDIAM 18 大阪外国語大学大学院研究室.
 山中(澤田)美恵子. (1991b). 「も」「でも」「さえ」の含意について」. 『日本語と中国語の対照研究』, 第14号, 25-39.